

「大学から始める「言葉の力」育成プログラム」総集編(ちりある編)

テーマA「基礎編(いろは編)でディスカッションを行ったテーマ」レポート採点基準表(ループリック)

		「不可」レベル	「可」レベル	「良」レベル	「優」レベル	「秀」レベル
序論	問い (10点)	問らしい問いがない(0点)	問いはあるが、客観的に根拠立てて回答できそうなものではない(4点)	客観的に根拠立てて回答するには問いが大きすぎる・細かすぎる(6点)	客観的に根拠立てて回答するのに適切な問いである(8点)	客観的に根拠立てて回答するのに適切であり、かつ、独自の切り口や課題意識に基づいた問いである(10点)
	問いの背景 (10点)	問いの背景が述べられていない(0点)	問いの背景は述べられているが、具体的な状況説明が無いなど、なぜ今その問いを問うのか、説得力に欠ける(4点)		問いの背景として具体的な状況説明が述べられるなど、問いを問う意義の説得力がある(8点)	問いの背景に十分な説得力があり、その問いを問うことに大きな意義があることを読み手に説得できている(10点)
本論	主張 (10点)	主張らしい主張がない(0点)	主張はあるが、それが問いの回答になっていない(4点)	問いの回答となる主張が述べられているが、客観的(=第三者が反論可能)なものになっていない(6点)	客観的な主張が、問いの回答として述べられている(8点)	客観的な主張が、問いの回答として述べられており、かつ独自性や新規性がある(10点)
	根拠 (20点)	根拠らしい根拠がない(0点)	根拠はあるが、客観的な裏付けがない(4点)	客観的な裏付けのある根拠が述べられているが、分量が足りないなど、主張を支える説得力に欠ける(6点)	客観的な裏付けのある根拠が述べられており、主張を支える説得力がある(8点)	客観的な裏付けのある根拠が述べられており、主張を支える十分な説得力がある(10点)
	論理性 (10点)	あらゆる反論をまったく予想していない(0点)	反論を予想してそれに答えようとしているが、反論の予想が検討違いである(2点)		反論を予想し、それに答えている(8点)	反論を十分に予想し、慎重に吟味しつつ、それに答えている(10点)
	議論の深み (10点)	考察の量・深さ・独自性がほとんどない(0点) 他人の意見をなぞるだけになっている(0点)	考察の量・深さ・独自性が不十分で、結論や主張がきわめてありふれたものに留まっている(4点)	議論にまとまりがあり、考察の量・深さ・独自性について水準のレベルにある(6点)	問題意識が高く、議論の考察の量・深さ・独自性においてレベルが高い(8点)	興味深い切り口で問題と回答を提示し、読み手を説得させる十分な考察の量・深さ・独自性を持っている(10点)
結論	結論 (10点)	結論がない(0点)	結論はあるが、残された課題の提示やまとめになっていない(4点)			残された課題の提示やまとめとして結論が述べられている(10点)
形式	引用文献・参考文献 (10点)	引用文献・参考文献がまったく明示されていない(0点)	引用文献、参考文献が明示されているが、自分の意見と引用の違いが不明確な箇所がある(4点)	引用した箇所と文献が明示されており、自分の意見と引用の違いは明確だが、文末に参考文献表がない(6点)		引用した箇所と文献が明示されており、文末に参考文献表がある(10点)
	誤字脱字 (5点)	誤字脱字が三つ以上あるか、段落が区切られていない箇所が三箇所以上あるか、文章量が規定の90%以下(0点)		誤字脱字が一～二あるか、段落が区切られていない箇所が一～二箇所以上ある(3点)		誤字脱字がなく、段落も適切(5点)
	文体 (5点)	「だ・である」体で統一されていない箇所がある(0点)				「だ・である」体で統一されている(5点)

「こどもに尊敬される大人とは」

今の中学、高校、大学生ほどの子どもに将来の夢や目標を聞くといったい何人の子どもがすぐに答えられるのだろうか。現代、特にここ数年は、携帯電話やパソコンなどの文明の利器により情報を得やすい環境が情報過多を生み出し、これからの人生に悩み戸惑う子どもが多くなっている。そんな子ども達を正しく前を向かせることのできる大人とはどのような大人なのか。答えは大きく2つある。1つ目は、こんな大人にならないようにしようと思わせる反面教師的存在の大人。2つ目は、目標に向かって努力している大人だ。

まず現代はとにかく情報が多い。人間は考える生き物である。それゆえ悩む。与えられた情報が多ければ多いほど悩むのは当然である。まだ多くの情報にさらされていない年頃の子どもの将来やりたい事・なりたいものを聞くと、たいていすぐに答えががえってくる。しかし、時間が経つごとにやりたいこと・なりたいもの、つまり夢や目標といったものを言えなくなるという事態が起こっている。こういった経験を持つ人がいるのは、現代の環境が要因の1つに上げられる。では、1つ目の答えである反面教師。この言葉の意味は「見習い学ぶべきではないものとして、悪い手本・見本となる事柄・人物」である。つまりこういった大人にならないための1つの例ということだ。たとえば、世紀の大発見として大々的に発表された理化学研究所の小保方晴子ユニットリーダーらによる STAP 細胞。しかしこの細胞は、捏造と改ざんによるものとして、発表が取り下げられた。責任を負わなければならない理化学研究所関係の方々は気の毒だが、倫理的にしてはならないことであると世界に改めて知らせたという意味でこの発表は大きな結果をもたらせたのである。何度もいうように現代は情報過多である。何がよくて何が悪いのかの判断がつきにくい。そのため反面教師的存在はその判断をしやすくするのに効果的である。

ここまでは情報を選択するのにあたって助かる存在の大人。さらにその選ばれた情報を元に将来を考えるのに必要な大人が存在が欠かせない。これが2つ目の答えである。目標に向かって努力をする人には人を動かす力がある。その努力を積み重ねてきた大人には積み重ねた時間だけの強い力が存在する。そういった大人の言葉に人々は影響される。また語らずともその姿を見ているだけでも影響を与える。最もわかりやすいのが、スポーツ選手である。オリンピックなどの世界を舞台とするものに普段はスポーツに興味を示さない人も熱中するのは選手たちの努力への姿勢に魅せられて事であろう。その他にもテレビ番組の「プロフェッショナル」のようにある1つの職業につく一人物の日々奮闘する姿にも影響力がある。良いものもたらす影響には、希望とそして導く力があるのだ。努力するのが苦手な人でも努力している人を見て感動する。その感動に影響されて努力する事だって時にはある。子どもの成長過程また人生形成、将来について悩むのにこういった大人は欠かせない存在である。

結論としていま、子ども達に正しく将来の人生形成を行わせるには、2種類の尊敬する大人が必要なのである。世間に見られている大人が間違いを大々的に示すのは善悪の判断

コメント [B1]: 問いの背景として完璧!

コメント [B2]: 「問い」も完璧

コメント [B3]: 漢数字「二つ」の方がいいです。通常レポートでは、「一つ」、「二つ」等の表現は漢数字を使うのが通例です。

コメント [B4]: 社会では善悪がつきにくい情報社会では、反面教師こそがその判断をする助けになる、という根拠はユニークで面白い!そして、小保方さんという具体例も挙げられており、明確です。

コメント [B5]: 「人を動かす力」という抽象的な表現について、それがどういう意味なのかしっかり説明できています。

をするのに好ましい。またその間違いを身をもって示すことは、その人が後から受ける責任や罪の重さが明確表されるので見聞きする側にとって非常に判断に貢献しているのである。その役を買って出た大人は大いに尊敬すべきだ。また大々的に人を正しく導く力を持つ人も当然尊敬すべきであろう。つまりこの2種類の大人が子ども達に正しく前を向かせるのに欠かせない存在なのだ。

広辞苑 第六版 岩波書籍

<http://mw.nikkei.com/sp/#/> (日本経済新聞)

コメント [B6]: 引用文献、参考文献、参考urlなどの書き方については、「レポート作成における文章表現と引用の心得」を参考に

【講師による総評】

「序論（問いの背景+問い）」、「本論（問いへの答え+その根拠）」、「結論（まとめ）」の構成は完璧です。特に序論、現代社会を「情報過多の社会」と特徴付け、子どもたちがさまざまな場面で判断を下すことができなくなっている、という状況を問題の背景に据えた点は独自性があり、その後の議論を深いものになっています。

本論は、二種類の「尊敬すべき大人」についてそれぞれ具体例を挙げつつ説得力のある根拠を述べて自説の理由付けを行えています。「反面教師」が導くことができる、という主張は一見すると逆説的ですが、極めて説得力のあるものになっています。

結論は、基本的な主張をシンプルにまとめ、繰り返しています。結論としてはオーソドックスで、十分なものですね。

個々の文章表現についても、少し抽象的な表現（たとえば「人を動かす知から」）についてきっちり例を挙げて説明しており、文意や論旨を伝えようという意味は読み手に好印象を与えています。

トータルで見て、極めてレベルの高い議論を、形式的にもレポートの構造にしっかり沿ったものに仕上げた、とてもよいレポートになっています。ルーブリック採点で86点になりました。

あえて改善点をあげるとすれば、内容的な点では、果たして「反面教師」は尊敬すべき大人なのか、という疑問に対して十分な再反論を準備できていない、というところでしょうか。反面教師が子どもたちを導くモデルになることは確かですが、彼らを尊敬してしまっているのかどうかはちょっと難しいところだと私には思われました。形式的な点をあげると、参考文献のあげ方でしょうか。こちらは、プロの研究者でも戸惑うところです。「心得」を見て参考にしてみてください。

「大学から始める「言葉の力」育成プログラム」総集編(ちりぬる編)

テーマB 「基礎編(ほへと編)でディスカッションを行ったテーマ」 レポート採点基準表(ループリック)

		「不可」レベル	「可」レベル	「良」レベル	「優」レベル	「秀」レベル
序論	問い (10点)	問らしい問いがない(0点)	問いはあるが、客観的に根拠立てて回答できそうなものではない(4点)	客観的に根拠立てて回答するには問いが大きすぎる・細かすぎる(6点)	客観的に根拠立てて回答するのに適切な問いである(8点)	客観的に根拠立てて回答するのに適切であり、かつ、独自の切り口や課題意識に基づいた問いである(10点)
	問いの背景 (10点)	問いの背景が述べられていない(0点)	問いの背景は述べられているが、具体的な状況説明が無いなど、なぜ今その問いを問うのが、説得力に欠ける(4点)		問いの背景として具体的な状況説明が述べられるなど、問いを問う意義の説得力がある(8点)	問いの背景に十分な説得力があり、その問いを問うことに大きな意義があることを読み手に説得できている(10点)
本論	主張 (10点)	主張らしい主張がない(0点)	主張はあるが、それが問いの回答になっていない(4点)	問いの回答となる主張が述べられているが、客観的(=第三者が反論可能)なものになっていない(6点)	客観的な主張が、問いの回答として述べられている(8点)	客観的な主張が、問いの回答として述べられており、かつ独自性や新規性がある(10点)
	根拠 (20点)	根拠らしい根拠がない(0点)	根拠はあるが、客観的な裏付けがない(4点)	客観的な裏付けのある根拠が述べられているが、分量が足りないなど、主張を支える説得力に欠ける(6点)	客観的な裏付けのある根拠が述べられており、主張を支える説得力がある(8点)	客観的な裏付けのある根拠が述べられており、主張を支える十分な説得力がある(10点)
	論理性 (10点)	ありうる反論をまったく予想していない(0点)	反論を予想してそれに答えようとしているが、反論の予想が検討違いである(2点)		反論を予想し、それに答えている(8点)	反論を十分に予想し、慎重に吟味しつつ、それに答えている(10点)
	読みの正確さ (10点)	テキストの主張・根拠をほとんど理解できていない(0点)	テキストの主張・根拠の理解が不十分(2点)	テキストの主張・根拠からなる論理の流れを理解できている(6点)	テキストの主張・根拠からなる論理の流れを理解できており、それを独自の問題関心につなげている(8点)	テキストの主張・根拠からなる論理の流れを理解できており、それを極めて独自の問題関心につなげている(10点)
結論	結論 (10点)	結論がない(0点)	結論はあるが、残された課題の提示やまとめになっていない(4点)			残された課題の提示やまとめとして結論が述べられている(10点)
形式	引用文献・参考文献 (10点)	引用文献・参考文献がまったく明示されていない(0点)	引用文献・参考文献が明示されているが、自分の意見と引用の違いが不明確な箇所がある(4点)	引用した箇所と文献が明示されており、自分の意見と引用の違いは明確だが、文末に参考文献表がない(6点)		引用した箇所と文献が明示されており、文末に参考文献表がある(10点)
	誤字脱字 (5点)	誤字脱字が三つ以上あるか、段落が区切られていない箇所が三箇所以上あるか、文章量が規定の90%以下(0点)		誤字脱字が一〜二あるか、段落が区切られていない箇所が一〜二箇所以上ある(3点)		誤字脱字がなく、段落も適切(5点)
	文体 (5点)	「だ・である」体で統一されていない箇所がある(0点)				「だ・である」体で統一されている(5点)

大陸のような大思想はグローバル社会で消滅するのか

選択テーマ：「動物のサイズ」

社会科学系テーマ 02「動物のサイズ」では、動物のサイズと人間の思想のサイズとの類似点への言及が多くみられる。このレポートでは、こうした人間の思想と動物のサイズへの言及が生物や人間を理解するためにいかなる意味をもつかを明らかにしようとするものである。そのためにはまず、この作品において筆者が動物のサイズと人間の思想に関して主張している内容をまとめる。次に、先述の問いに対する答えとして、グローバル社会において人間の思想は大陸の動物と同じように、大思想がさらにそのスケールを増していくだろうという解釈を提案する。この仮説は「動物のサイズ」の筆者の主張と反対の立場を取るものである。そのため、筆者の主張に反駁を行う。そして、今回の仮説と比較し、検討する。最後に、こうした解釈を、あらためて本文中の動物のサイズと人間の思想の関係に適用することによって、仮説の正しさを検証する。

大陸のような大思想はグローバル社会で消滅するのか

キーワード（本文中の内容から、解説が必要なものを挙げて簡単に説明を加えた）

生理的時間：物理的時間（人間の作った時計による時間の概念）ではゾウはネズミよりもずっと長生きだ。しかし、生理的時間から測ると、体のサイズによらず一定（平等だ）。生理的時間は、単純な物理的時間の長さではなく、生物ごとの一生を相対的に捉えるための尺度である⇔時計による時間の常識

サイズの生物学：ヒトがおのれのサイズを知る、これは人間にとって、もっとも基本的な教養だと筆者は主張する。そして、生理的時間という立場の視点から見ると、人間の考え方や行動なども、ヒトという生物のサイズを抜きにしては理解できないとした。

コープの法則：同じ系統の中では、大きなサイズの種は進化の過程で、より遅れて出現する傾向があるという法則。「動物のサイズ」の本文で登場したゾウやウマはこの法則にあてはまる有名な例である。筆者はコープの法則が成立する要因について、「進化は小さいものからスタートするからだ」というスタンレーの説を引用している。本文中では、「コープの法則が成立するということは、サイズの大きいものが生存に有利だということを意味するのか」という問題提起から、筆者はサイズが大きいことの利点と欠点を挙げ、サイズが小さい場合との比較を行った

定向進化説：動物には特定の方向に進化しようとする性質が本来備わっているという考え方。現在の進化学では受け入れられていない。現在では突然変異によって生じた形質が、自然淘汰にかけられて進化が起こるが、変異そのものには方向性はないとされている（中立説→注釈の※1へ）。

島の規則：島に隔離されると、サイズの大きい動物は小さくなり、サイズの小さい動物は大きくなるという説（大氷河期の哺乳類の化石を対象に調べた）。島の規則が成立した要因は大きく二つ挙げられる。①捕食者の少ない環境（生物が大きくなるのは捕食者に食われにくくするため。小さくなるのは、捕食者から身を隠すため→動物のサイズを本来のサイズから変えるため、無理にサイズを変えていく）②動物にとって無理のないサイズの存在（島だと、捕食者がいないため動物たちは自分に無理のないサイズになっていく。大きいものは身を小さくして、少ない食料で生き延びられるように変化していく。小さい動物は、成長期に十分食べて大きくなった個体が増え、種全体でも大柄になっていく）

大きいことにもなう犠牲：非常に大きいということは非常に特殊化していることである。それはつまり、進化の袋小路に陥るということである。進化の袋小路に陥った種は環境の変化に対応できず、絶滅へと向かうと筆者は主張する。

人間の大思想と大陸：大陸に住んでいれば、とてつもないことを考え、常識はずれのことをやることも可能だろう。獐猛な捕食者に比せられるさまざまな思想と戦い、鍛え抜かれた大思想を大陸の人々は生み出してきた。筆者はこれら的大思想に対して畏敬の念を抱くと同時に「ゾウのようなもの」（動物として無理のあるサイズをとっている）だと指摘する。大思想は人間が取り組んで幸福に感ずる思考の範囲をはるかに超えて、巨大なサイズ

大陸のような大思想はグローバル社会で消滅するのか

になってしまっている可能性がある。また、本文における大陸は主にアメリカのことを指す

島で生活していくうえでの知恵：島では出る釘は打たれる。島国という環境ではエリート
のサイズは小さくなり、ずばぬけた巨人と呼び得る人物は出てきにくい。逆に小さい方、
つまり庶民のスケールは大きくなり、知的レベルはきわめて高い。島に生物が流入すると、
大型の生物は小型化し、ネズミなどの小型な動物は大型化することになぞらえている。本
文における島国は主に日本のことを指す

似合いのサイズ：動物に無理のないサイズがあるように、思想にも人類に似合いのサイ
ズがあるということ

実験：筆者は本文中で「何億年という時間をかけて、生物たちは数え切れないほどの実
験を行ってきた」として、その結果が現在の地球上に存在する生態系であり、実験過程は
化石という形で保存されていると述べている。それらをシミュレーション・モデルとして、
いち生物である人間の事象に使うことの妥当性を主張している。

大陸の時代と島の時代：筆者は「いままでは「大陸の時代」だった」とし、しかし、ネ
ットワークの発達により、地球はだんだん狭くなり、一つの島として捉えなければならな
い状況が現れつつあると述べる。筆者は、これからは、「島の時代」になると推測し、そし
て、これからの人類にとって、日本人がこれまで培ってきた島で生活していくうえでの知
恵が貴重な財産になるべきだと主張した。

※今回のレポートのテーマである「動物のサイズ」の筆者のことを、このレポートの文
中では「動物のサイズ」の筆者」もしくは、単に「筆者」と表記する。

大陸のような大思想はグローバル社会で消滅するのか

1. 問題提起

「動物のサイズ」の筆者の主張の要約を以下に示す。

動物のサイズが、動物の生き方に大きな影響を与えているように、人間の考え方や行動なども、ヒトという生物のサイズを抜きにして理解できないのだ。そして、動物にはその種によって無理のないサイズが存在し、捕食者がいなくなれば、それが顕著に現れる。つまり、思想にも人類に似合いのサイズがあるのだ。グローバル社会において、大思想は滅びる運命にある。そこで、日本の島国的な考え方が重要になってくる。

「動物のサイズ」の筆者は「動物のサイズが動物の生き方に大きな影響を与えている」として、哺乳類における、体重と生理的時間には相関があることを主張した。そして、それを踏まえたうえで「島に隔離されると、サイズの大きい動物は小さくなり、サイズの小さい動物は大きくなる」、「動物たちは自分に無理のないサイズになっていく」という島の法則を取り上げ、さらに、人間社会でも島の法則が適用可能である可能性を示した。最終的に、グローバル社会は島国的な環境であり、大陸の大思想のような考え方から日本人が持っているような知恵の文化へと転換していくとしている。

本稿では、以下の二点に対して反駁を試み、次いで新しい仮説として、「グローバル社会において人間の思想は大陸の動物と同じように無理のあるサイズへと極端な進化を遂げていくだろう」と主張する。

- ・筆者が設定した島の法則の定義のうち「無理のない動物のサイズ」という記述
- ・これからは「島の時代」になるという筆者の主張

2. 「動物のサイズ」での筆者の記述に対する反駁と論証

まず、島の法則に関する「動物のサイズ」の筆者の記述の、「自分に無理のないサイズ」という箇所について。私は島における動物のサイズの変異は単に環境への適応であると考え、「動物のサイズ」の筆者の主張する「無理のない動物のサイズ」、という考え方は定向進化説を根底に持っているものであり、奇しくも筆者自身が述べたように、「変異そのものには方向性はない」という現代進化学の見解と矛盾する。「もし進化に方向性が見られたなら、それはその方向にたまたま変わったものが、より生存に有利だったからだと考えられ」「一面だけの事実が指し示す方向が、必ずしも正しい方向ではない」ということだ。たとえば、同一種の交配からは基本的に親と同じ種、似た形質の子が誕生する可能性が高い。しかし、それは変異の機能的な制約や、単純に生存に大きく関わらない遺伝子の変異が表現型として形質に反映されていないだけである（※1）。また、突然変異によって爆発的に進化が起きにくいのは、遺伝子を正確に次の世代へコピーする作業が行われ、親の世代か

コメント [B1]: どんな主張を立てるか、を序論で明確に示しています。また、主張自体も野心的で面白い。

コメント [B2]: 筆者の考えの根底にはなぜ定向進化説がある、ということになるのか、その理由が述べられていないのでは？無理のないサイズのままに留まっている生物は、ライバルが多い環境では淘汰されてしまうが、島国では淘汰されずにすむため、結果的に無理のないサイズのままの生物の方が逆に無理のあるサイズに突然変異を起こした生物よりも生き残りやすい、と考えるならば、筆者の考えは必ずしも定向進化説をベースにしている、としなくてもすむのでは？

大陸のような大思想はグローバル社会で消滅するのか

ら共通する遺伝子ほど変異が起きにくく、さらに交配や環境の変化といった選択によって遺伝子が継承されにくいからだと考えられる。変異は確かに自然選択によって淘汰されながら蓄積していく。しかし、「動物のサイズ」の筆者が主張した「普通の動物」や「無理のないサイズ」という考えは、それらを超えて、生物にはその原型となったモデル種とでもいべき、本来あるべき生物としての形を追い求めている。変異のうちには、自然選択に有利もしくは不利に働くものがある。しかし、自然選択に対して中立な変異も存在する以上、単純に生物がその理想形に向かって進化していると断ずるのは無理のある主張だと考える。「動物のサイズ」の筆者は本文中で定向進化説を誤ったものだとしながら、定向進化説を根底に持った思想から主張を行っており、これは矛盾している。

次に、大思想は人類には無理のある思想のサイズであり、これからは、「島の時代」、になる、という主張について。実際に地球上でも世界が陸続きで繋がっていた時期がある。「動物のサイズ」の筆者はグローバル社会を一つの島と呼んだが、同じ地球上に今から約四億年前から二億年前に存在したパンゲアは島ではなく大陸と呼ばれる（※2）。それまであった大陸がプレート移動により合体し、実際に一つの島（大陸）となったのだ。大陸が誕生した当初は、内陸地が非常に乾燥しており、全ての大陸が地続きであったために動植物の移動が促進され、生物多様性は現在よりも乏しかった。しかし、パンゲアが再び分裂を開始しはじめた頃のジュラ紀には、温暖かつ湿潤な気候により、青々とした植物や多数の動物が出現する土台が生まれ、ステゴサウルスやブラキオサウルス、アロサウルスなどの大型恐竜を含むさまざまな種類、サイズの恐竜が出現していた。「動物のサイズ」の筆者の主張では、このままだと人類の思想は島の法則に従って小粒化していくと思われる。だが、もし、本当に、筆者が本文中で述べていた「実験」を「シミュレーション・モデルとして人間の事象に使っても悪いことはない」とするならば、グローバル化によって人類の間に島の「知恵」が浸透していくという考えはもう一度よく検討されなければならない。グローバル化はかつての超大陸がそうであったように、世界の大陸的な要素を強めるのではないか。大陸で極端なサイズの動物が出現するように、人類の場合もグローバル化によって島化していくというよりも、大思想の傾向が強くなっていくのではないだろうか。逆に、島の「知恵」のほうが無くなっていくのではないかと、という可能性も考えられる。

3. 主張

パンゲアにおける生物の多様性の増加に関するプロセスを現代のグローバル社会と比較すると、現在、世界にはあらゆる文化、つまり思想が誕生する土台が存在している。私は筆者の主張するような島国の思考が見直される、つまり、「無理のないサイズ」に世界の思考が変異していくよりも、かえって、世界中のあらゆるコミュニティーが自分たちの文化を発展させ、おのおのの思想、価値観がしのぎを削るような思考の恐竜時代が幕を開けるのではないかと考える。もちろん、パンゲアが成立した際に生物の大絶滅が起こった（※3）ように、人類がいままで築いてきた英知や成熟した思想の諸々が崩壊し、再構築を余

コメント [B3]: グローバル化がかえって環境にムラを作る（生存しやすい場所やそうでない場所の差を生み出す）という主張はユニークで興味深いです。

大陸のような大思想はグローバル社会で消滅するのか

儀なくされる可能性も考えられる。しかし、それならば、その可能性と同じくらい、大絶滅の後にまた恐竜が繁栄したように、新しく構築された思想が人類の間に広く根付く大思想として展開する可能性も考慮されなければならない。

これらを踏まえると、この文章は単に島の思考が見直されていくだろうという楽観的なものではなくなる。もし、グローバル化が島化ではなく、大陸化であった場合、大思想によって駆逐される島の思考法を保護しなければならない、という危機感を帯びたものへと変わるのだ。現状の例を挙げるなら、ニュージーランドの「飛べない鳥」カカポが島の外から流入してきたネズミによって絶滅の危機に瀕している（※4）。さらに、カカポだけでなく、世界の至る所で島という楽園に侵入してきた外敵によって絶滅させられようとしている種が存在する。それらを鑑みるに、大陸のゾウが進化の袋小路に陥ったと本文中に言われていたように、島の「知恵」もまた、外敵のいない生活に慣れてしまって、今後はグローバル化によって大陸の思想に蹂躪される運命にあるのではないか。筆者は島の「知恵」が見直され、今後は重要になってくると指摘した。しかし、本当にそうであろうか。

生物の進化は捕食者や自然環境といった要因による淘汰や選別によって現在まで続いてきた。その進化の法則を人間の思想にも当てはめるなら、大思想によって細々とした思想が「捕食」される過程を経て、人間の思想は発展してきた。そして、思想の発展は文明の発展につながった。近代における合理主義や物心二元論に対する科学革命や産業革命などが良い例だ。ならば、「動物のサイズ」の筆者が述べるように、本当に大思想が廃れてしまう運命にあるのなら、人間の文明の発展もまた廃れていってしまう運命にあるのだろう。逆に、人類が文明を発展させ続けていくためには、大思想を潰えさせてしまっはならない。文明の衰退はすなわち、人類の衰退であり、種の存亡に関わる一大事である。もちろん、人間の思想の発展の歴史は生物種の進化の様子とまったく同じというわけではない。単純に大思想が別の思想を駆逐するだけでなく、相互に影響を受けながらその思想が発展するというケースも考えられる。日本の仏教と神道の関係のようにお互いに混ざり合いながら共存していく道も考えられる。しかし、神道が他の仏教国では広まらなかったように、島国の知恵には広く世界へ打って出ていく積極性が足りない。そんなことでは世界が一つの島（大陸）になった際に、他の思想を押しつけて自分の思想を貫いていくことはできないと判断する。

4. まとめ

大陸の大思想はこれから衰退するよりもむしろ、そのサイズをさらに巨大化させていくと考えられる。しかし、一方で、絶滅危機の動物を保護する取り組みのように、島の「知恵」がこれから保護されていく可能性や、大思想がゾウのように絶滅の道を辿った場合、恐竜と同じように人類もまた絶滅へと向かうのか、といったことについてはまだ分からない。また、今回は内容について反駁を行ったが、「動物のサイズ」の筆者が最終段落で述べた「日本人は島に住んでいるのだから、自己のアイデンティティーを確立するためにも、

コメント [B4]: 自説をしっかりと具体例をあげて根拠付けています。例の選定も適切で説得力あり。

コメント [B5]: 厳密に言うと、これは論理的には成り立たないかな？

大陸のような大思想はグローバル社会で消滅するのか

島とは何かを、まじめに考えるべきだ」という意見は尊重されるべきだ。大陸の思想から自分たちの価値観を守り、文化として維持していくために、日本人の思考の武器を確認しておく必要がある。

5. 注釈

※1. <http://www.tmd.ac.jp/artsci/biol/textbiodiv/Chapt8.doc>

(2014年6月27日閲覧)を参照されるとわかりやすい。

分子進化の中立説：木村資生が1968年に発表した。「自然選択にとって有利でも不利でもない中立な突然変異の置換速度は、タンパク質分子が違って年当りほぼ一定である」とした。遺伝子やタンパク質などの分子の世界の進化は、自然選択とは異なるメカニズムでおこることを提唱した。DNAにおこる変異のうち、生存に有利な変異は非常に少なく、ほとんどが中立な変異であり、この中立な変異であり、この中立な遺伝子が偶然で集団に広まっていく(遺伝的浮動)と考えた。

※2. 『見つめる生物ファール EYE』 東京法令出版 2006年度版 pp. 204-06

には「パンゲア大陸」とある。また、

瀬川聡 (2009年) 『地理 B の点数が面白いほどとれる本』 中経出版 pp.31

には、「大陸の移動」という項目の図の中で「パンゲア」と表記されている。

※3. Ken, S. (2008) "Devastation of terrestrial ecosystem recorded by sedimentary organic matter in the environmental disturbance events of Permian-Triassic boundary (<SPECIAL ISSUE>Organic geochemical analyses in the Phanerozoic environmental disturbance events)", *Researches in organic geochemistry*, vol.23/24, pp. 13-22

を参照。

※4. ウィリアム・ソウルゼンバーク (野中香方子訳) (2014) 『ねずみに支配された島』 文藝春秋社 pp. 16-17

6. 参考文献

川幡穂高 (1998) 「顕生代の地球表層環境変動—気候、生物イベント、物質輸送、そしてスーパーブルーム—」 『地質学論集』 第49号、pp.185-198

大陸のような大思想はグローバル社会で消滅するのか

【講師による総評】

注、参考文献など、形式的にレポートに必要なものはきっちりそろっているばかりか、要旨と用語集も冒頭についています。形式的にこれだけ完備されていると、レポートと言うよりはすでにちょっとした研究論文といった趣すらただよってきて、「ただものではない」感じますね。そして、内容も全体的に極めてレベルの高いものに仕上がっています。参考文献には英語文献まで入っています。このレベルになると、ちょっと普通の学生がまねてみよう、という領域を超えてしまっているような気もしますね・・・(笑)。

構成も、「序論」、「本論」、「結論」がほぼ堅固に構築できています。そして、指定テキスト読解型のレポートとしては、筆者の主張の骨子をまとめたうえで、その問題を指摘し、代案を提示する、というもっとも高度なスタイルで作られており、難易度の高いものになっています。ただ、形式的な構成について言うと、序論の「問い」に当たる部分が、本文中ではなく「要旨」の中にかかれていて（要旨の2行目から3行目）ため、このレポートが、どんな問題意識に基づいて書かれているのか、がちょっと分かりにくいと感じました。重要部分なので、本文中にも「問い」とその背景となる問題意識は書いておく必要があるでしょう。本論は、筆者の主張に対して二つの側面から反駁を行うものになっており、論理的にかなり手堅くしっかりしたものになっているため、主張自体の説得力は高いです。要所所で自説の根拠付けのために具体例が挙げられている点も、高く評価できます。しかし、反論を予想し、それに答える、という部分は見当たらなかったような・・・(予想される反論に答えられるよう、慎重に論を進めています、ループリックでは残念ながら減点にせざるを得ません)。結論部は、しっかり書けていますね。

以下、内容について少し触れます。テキストの筆者は、「グローバル化で世界は狭くなった」ことを以てして世界は島化しているといった趣旨のことを述べていますが、それに対してこのレポートでは、世界が狭くなったのは孤立・離散して存在していた島が、大陸に近づいてしまったということを描くようとしているのでしょうか。そう読めるような、そうでもないような、ちょっと読み手の解釈の努力が必要で、結局の所グローバル化によって思想のサイズが巨大化してゆくというコアの主張の理由が少しぼやけているように感じました。もしこのレポートで言われているのが、「世界の島化」というよりは、むしろ島が大陸に併呑され、世界全体が一つの大陸になっているということがグローバル化の実情なのだ、ということなのだとしたら、そこはもっと明確に結論部分で言ってもよかったですように思います。

さて、以上トータルで見て、極めてレベルの高い議論を、形式的にもレポートの構造にしっかり沿ったものに仕上げた、とてもよいレポートになっています。ループリック採点 82 点になりました。